

## 青年期後期の恋人への依存性に関する研究：恋人との関係評価及び依存対象との関連から

田中，純  
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/18426>

---

出版情報：九州大学心理学研究. 10, pp.139-147, 2009-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 青年期後期の恋人への依存性に関する研究

— 恋人との関係評価及び依存対象との関連から —

田中 純 九州大学大学院人間環境学府

**Effects of the dependence tendency on the romantic relationship among late adolescents:  
Correlates to the evaluation of the romantic relationship and the object of dependency**

Jun Tanaka (*Graduate School of Human-Environmental Studies, Kyushu University*)

The purpose of the present study was: (1) to construct the scale for dependence tendency in the romantic relationship; (2) to examine the relationship between dependency tendency and evaluation of the romantic relationship; (3) to examine the relationship between dependence tendency and the object of dependency. The questionnaire was completed by 159 late adolescents. Results of the factor analysis yielded four factors: (1) dependency demands, (2) dependency refusal, (3) maladaptive mode of dependency, and (4) adaptive mode of dependency. Furthermore, results of the cluster analysis revealed three styles of dependency in the romantic relationship: (1) secure dependency, (2) dependency avoidance, and (3) over-dependency. Results of the ANOVA suggested that adolescents with the “secure dependency” style had the good relationship with their partners and others. However, adolescents, whose relationship style, were characterized as “dependency avoidance,” were not satisfied in their romantic relationship, and they did not consider their relationship to be important. Finally, adolescents with the “over dependency” style only regarded their relationship with their partners as important, and they tended to neglect other relationships.

**Key Words:** dependence tendency, romantic relationship, late adolescents

## 1. 問題と目的

### 1. 青年期後期の恋愛について

青年期は心理的離乳の時期であり、それまで養育者に全面的に依存していた状態を離脱して、将来大人として自立を達成するための動きを始める時期である（遠藤，2000）。今まで依存していた対象が、親から友人・恋人などへと移行していく時期にあたる。身体的成熟に伴い、性的な衝動・異性への関心を活性化させるので、中には特定の異性の友人と積極的な交流を始める青年も出現する（平木・中釜，2006）。そのため、多くの青年にとって異性との関係、特に、恋愛は重大な関心事となり、悩みの源泉にもなる（松井，1990）。しかし、詫摩（1986）は、「青年期の恋愛はすべて順調に進行するものではなく、さまざまなきごとがあり、それらの体験を通して、その人自身が人間的に成長し、精神的に成熟していくことが大切なことである」と述べており、悩みの源泉になるからこそ、青年が恋愛経験を通して心理的に成長できると主張している。このように恋愛や異性との関係は、青年の心理的成長に大きな影響を与える対人関係のひとつといえる（小塩，2000）。特に、成人期の準備段階にあたる青年期後期は、家族形成の準備段階の時期である。多くの青年は、性に伴う精神的・社会的課題にも気づくようになり、男性・女性として親になり、人間として次

世代を生み育てる準備が必要なことを予感する（平木・中釜，2006）。平木（1990）は、結婚後の夫婦関係の発達には、個人の発達と自立が必要であり、家族と家族との中間期（源家族からの分化と新しい家族の形成との間の時期）に夫婦の愛の形成の基盤が潜んでいると考えており、その中間期の恋愛から求婚に至る配偶者選択のプロセスが夫婦関係の発達に大きな影響を持つと述べている。つまり、青年期後期の恋愛関係が夫婦関係の発達に影響を与えるのである。本研究では、親への依存から自立し、新しい家族の形成などの将来的展望も視野に入れた青年期後期の恋愛に着目する。

### 2. 依存性について

従来、依存と自立は対極概念として考えられてきたが、「依存性は、人に普遍的なもので発達に伴って消失するのではなく、より成熟したものに変容していく」（関，1982）と捉えられてきている。つまり、「依存から自立への移行」ではなく、「依存性の発達や、依存性が成熟したものに変容していくことが自立に不可欠である」と捉えられているのである。

#### (1) 依存性の研究

高橋（1968）は、依存性の発達変容の過程が自立性の発達過程であるとする立場にたつて、実証的研究をすすめた。高橋は、依存性を「<sup>1</sup>道具的な価値ではなく、精

精神的な助力を求める要求である」と定義される依存要求を充足するためにひきおこされる依存行動のパタンである。」と定義し、(a) 依存の様式、(b) 依存の対象、(c) 依存要求の強度の3点に注目した。一方、関(1982)は依存性を「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める傾向であり、人間に対する関心の向け方を記述する1つの概念である」と定義し、依存性のあり方を(a) 依存欲求、(b) 統合された依存性、(c) 依存の拒否の3点の組み合わせによって検討した。まず依存欲求とは「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める欲求」である。次に統合された依存性とは「成熟し、安定し、統合された人格に備わっているべき依存性であり、又、相互依存的な、他者との良好な関係を保ち、且つ、そこから得た安定感を基礎として自立的になるために、必要不可欠な依存性」である。最後に依存の拒否とは「顕在的には、他者への依存を拒否する形で現れるが、潜在的に、依存不安があると推測される態度」である。

## (2) 依存性のあり方

高橋や関の研究では、依存性のポジティブな面に注目している。関(1982)は「依存傾向の欠如・依存の拒否が、適応上、何らかの問題性を含むことは了解可能であり…」というように、適応上の問題性については依存傾向の欠如と依存の拒否などの“依存欲求を自分の内にとどめてしまうこと”を指摘しているものの、特定の個人に対する執拗さなど、依存欲求の充足の仕方そのものの問題性、言い換えれば“依存欲求を自分の外に出しすぎてしまうこと”については触れていない。そこで、依存欲求を充足するために引き起こされる依存行動の様式を依存様式として扱い、“依存欲求を自分の外に出しすぎてしまうこと”を依存様式の1つの様相として捉え、依存性についてより深く検討していく。渡辺(2002)は、対人関係依存の中で、発達段階にふさわしく、愛情をもとにした対等な関係の中にある成熟した依存を「よい依存」と呼んだ。それに対して、上下関係をもとに自分の安心を導くために相手をコントロールしようとする依存を「悪い依存」と呼んだ。「よい依存」には関(1982)の「統合された依存性」も含まれると考えられる。また、「悪い依存」には依存性パーソナリティ障害も含まれている。依存性パーソナリティ障害は、DSM-TR(American Psychiatric Association, 2000/2004)によると、「面倒をみてもらいたいという広範で過剰な欲求があり、そのために従属的だがみつく行動をとり、分離に対する不安を感じる」という特徴を有する。このような特徴は、他者に過剰に依存する者も有しているものだと考えられる。以上より、本研究では、依存性を「道具的な価値ではなく、精神的な助力を他者に求める傾向」と定義し、依存性を 依存欲求、 依存拒否、 依存様式

の3点から捉え検討する。それぞれの定義は以下のとおりである。

依存欲求：道具的な価値ではなく、精神的な助力を他者に求める欲求。

依存拒否：顕在的には、他者への依存を否定する形で現れるが、潜在的に依存不安があると推測される態度。

依存様式：依存欲求を充足するために引き起こされる依存行動の様式。

適応的側面...対等な関係の中で、愛情をもとに支えあい、与えあい、癒しあい、安定感を得られる相互的な依存様式。

不適応的側面...上下関係をもとに、相手を支配する行動や従属的・献身的態度をとり、分離不安から相手に執着するような依存様式。

## (3) 依存対象について

高橋(1970)は、大学生・高校生の女子の比較から、依存の対象の内容についてそれぞれの年齢段階に共通の一般的な差異がみられることを明らかにしている。親友は高校生においては重要な依存対象であるが、大学生においては愛情の対象(恋人)と競合するように重要でなくなることや、大学生においては単一の依存対象になりやすいのは愛情の対象(恋人)が多く、ついで母親、尊敬する人が多いことなどが示されている(高橋, 1970)。現代青年が依存性をむける対象として、どのような人物・もの・ことが挙げられるのか検討することにより、依存性についてより詳細に理解することができるだろう。

## 3. 恋人への依存性について

高橋(1968)は、青年期の女子において愛情の対象をもつ事によって依存欲求が増大することや、道具的価値よりも情緒的支えとしての恋人が存在することを明らかにしている。一方で、Howard(1982/2001)は、依存欲求を満たすために相手を支配する方法として、力を見せつける(暴力による支配)、「弱さ」で支配する、ひたすら尽くす、罪悪感を抱かせる、嫉妬させる、の5つを代表例として挙げている。このように恋人をコントロールしようとした場合、恋人との関係の不和や、DVなどのトラブルが生じる可能性があり、恋人と安定した関係が築けず、葛藤を抱えることになるのではないだろうか。以上のような問題意識から、筆者は他者への依存性において、依存対象として恋人に焦点を当てた研究が必要であると考えられる。

## 4. 関係評価について

恋人への依存性を研究する上で、恋人との関係をどのように認識しているかということも重要になる。金政・

大坊 (2003) は、愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響を検討するため、関係評価を用いた。その結果、愛着スタイルによる関係満足度の違いは見られなかったが、関係重要度において安定型は得点が高く、回避型は得点が高いという結果を得ている。各愛着スタイルの特徴と依存性は類似点があり、恋人への依存性の様相により関係評価は異なることが予想される。

## 5. 本研究の目的

先行研究を踏まえ、本研究においては以下の仮説が考えられる。

仮説 1: 恋人への依存様式の適応的側面が強いほど、恋人の存在は情緒的安定をもたらすと考えられるので、恋人との関係満足度ならびに関係重要度は高いであろう。

仮説 2: 恋人への依存様式の不適応的側面が強いほど、恋人との分離に不安を感じるだろうと考えられるので、関係を重要視しており、また関係を持続したい欲求があるのではないかと予測される。そのため、恋人との関係重要度は高いであろう。

仮説 3: 恋人への依存拒否が強いほど、関係重要度が低いであろう。

これらの3つの仮説を検証し、青年が認識している恋人との関係性と恋人への依存性の関連について検討することで、恋人への依存性について更に理解を深める。また、恋人への依存性の様相による依存対象の違いについて、自由記述により質的な検討を行う。その際、恋人への依存性と依存対象についての関連を検討することで、周囲の人物との対人関係についても示唆が得られると考えられるため、依存対象としての人物に焦点をあてる。

以上より本研究では、青年期後期の恋人への依存性の様相を明らかにするため、以下の目的で研究を行う。

第一研究：恋人への依存性尺度を作成すること。

第二研究：恋人への依存性と恋人との関係評価との関連を仮説検証的に検討すること。及び、恋人への依存性と依存対象との関連を探索的に検討すること。

## II. 第一研究

### 1. 目的

青年期後期の恋人への依存性の様相を明らかにするため、依存対象を恋人に限定した恋人への依存性尺度を作成すること。

### 2. 方法

(1) 調査対象：恋人が1人以上いる、大学生、大学院生、専門学校生、社会人に対して調査を行い、回答に不備のなかった159名（男性68名、女性91名）を分析の

対象とした。平均年齢は20.81歳 ( $SD = 1.87$ ) であった。

(2) 調査時期：2007年11～12月。

(3) 調査内容：依存性の自己評定質問紙（関，1982）を参考に、依存対象が「恋人」に特定されるように項目を作成した。下位尺度は 恋人への依存欲求尺度（13項目）、恋人への依存拒否尺度（13項目）、恋人への依存様式尺度（適応的側面20項目、不適応的側面20項目、計40項目）である。恋人への依存様式については、予備調査を行なった。関（1982）の「統合された依存性」尺度と予備調査で得られた項目を合わせて、恋人への依存様式尺度を作成した。～の各下位尺度の項目について“5：非常に当てはまる”～“1：全く当てはまらない”の5件法で回答。計63項目。

(4) 分析方法：尺度の因子構造を検討するため、因子分析を行う。

## 3. 結果

因子分析（主因子法・プロマックス回転）の結果、4因子39項目が抽出された（Table 1）。

第1因子は、「何かをする時には、恋人に気を配ってはげましてもらいたい。」などの項目が高い正の負荷を示した。この因子に含まれる項目は、関（1982）の依存性尺度における依存欲求に関する項目や、恋人を頼ろうとする行動を示す項目であったため、「依存欲求」因子と命名した。第2因子は、「安心して恋人の世話になれないほうだ。」などの項目が高い正の負荷を示した。この因子は、すべての項目が関（1982）の定義する「依存の拒否」の項目であり、恋人へ依存することを否定する態度を示していると考えられたため、「依存拒否」因子と命名した。第3因子は、「恋人から嫌われたくないので、恋人の意見には反対しない。」などの項目が高い正の負荷を示した。この因子に含まれる項目は筆者の定義する依存様式の不適応的側面を示す項目であり、分離不安から恋人に対してとる従属的行動を示す項目であったため、「不適応的依存様式」因子と命名した。第4因子は、「恋人のことを思い出すだけで、心がやすらくなるので、落ち着いていられる。」などの項目が高い正の負荷を示した。この因子は、関（1982）の定義する「統合された依存性」の項目や、恋人との関係から心理的な安定感を得られるといった筆者の定義する依存様式の適応的側面の項目から構成されていたため、「適応的依存様式」因子と命名した。

また、4因子それぞれの信頼性を確かめるため $\alpha$ 係数を求めたところ、依存欲求因子は $\alpha = .85$ 、依存拒否因子は $\alpha = .86$ 、不適応的依存様式因子は $\alpha = .82$ 、適応的依存様式因子は $\alpha = .82$ であり十分な信頼性をもつと判断された。以上39項目4因子から成る尺度を、本研究における恋人への依存性を測定する、恋人への依存性尺度として扱う。

Table 1  
恋人への依存性尺度の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転後の因子パターン)

	1	2	3	4
<b>第1因子 「依存欲求」因子 (13項目, <math>\alpha=.85</math>)</b>				
何かをする時には, 恋人に気を配ってはげましてもらいたい。	.77	.04	.01	-.11
何かにつけて恋人に味方になってもらいたい。	.74	.10	-.04	.03
病気の時や, ゆうつな時には, 恋人に心配してもらいたい。	.72	.07	-.01	-.01
困っているときや悲しいときには, 恋人に気持ちをわかってもらいたい。	.71	.01	-.07	.09
恋人には, 私の健康状態などに気を配ってもらいたい。	.57	-.04	.00	-.03
恋人になら少々無理を言ってもいいと思う。	.51	-.05	-.24	-.12
恋人の対人関係が気になる。	.46	.12	.14	-.05
最後は自分で決めるにせよ, 困った時には, 恋人の意見を求めしてみる。	.46	-.08	.05	.11
重要な決心をする時には, いつも恋人の意見が聞きたい。	.46	-.02	.24	.01
一人でどうにもならない時は, その時々で恋人に相談する。	.45	-.08	.10	.10
恋人には, いざという時には, 無理な頼みごとをするだろう。	.43	-.17	-.25	-.04
一人で決心がつかねる時には, 恋人の意見に従いたい。	.41	.10	.28	.04
恋人には自分の弱い部分をみせることができる。	.41	-.20	-.12	.20
<b>第2因子 「依存拒否」因子 (9項目, <math>\alpha=.86</math>)</b>				
安心して恋人の世話になれないほうだ。	.08	.81	-.03	.02
恋人に頼る立場になるとどうも落ち着かない。	.05	.77	-.05	.08
恋人の世話になるのは恥ずかしいと思う。	.09	.74	.12	-.06
恋人にでも甘えることのないほうだ。	.01	.70	-.23	.04
自分のために, 恋人に何かやってもらうのは苦手だ。	-.03	.63	.06	.08
恋人には, 絶対借りをつくりたくない。	-.01	.59	.18	.05
どんなに困った時でも, 恋人に頼らないほうだ。	-.24	.52	-.12	.05
恩返しできないなら, 恋人に援助を求めるのは, ためらわれる。	.06	.52	.15	.02
自分のことは, どんなことがあっても自分ひとりではしないと気がすまない。	-.11	.48	-.07	.07
<b>第3因子 「不適応的依存様式」因子 (9項目, <math>\alpha=.82</math>)</b>				
恋人から嫌われたくないので, 恋人の意見には反対しない。	-.21	.14	.78	-.01
恋人の機嫌をうかがって行動する。	.04	.10	.66	-.09
自分に自信がないので, 恋人から離れるのは不安だ。	.10	-.07	.61	-.01
恋人と離れると自分の支えを失う気がして不安になる。	.08	-.17	.61	-.05
恋人から嫌われたくないので, 「したくない」と感じることもする。	.02	.17	.56	-.01
恋人との約束を何よりも優先させる。	-.13	-.13	.53	.21
恋人との関係が悪くなると, 他のことが何も手につかない。	.10	-.06	.53	.16
気分が乗らないときでも恋人から求められれば sex をする。	-.18	.01	.46	.06
自分の考えだけで行動するのは, 自信がない。	.26	.04	.45	-.26
<b>第4因子 「適応的依存様式」因子 (8項目, <math>\alpha=.81</math>)</b>				
恋人のことを思い出すだけで, 心がやすらかになるので, 落ち着いていられる。	-.10	.14	.01	.83
恋人のことを思い浮かべて, 元気を出すことがある。	.10	.07	-.07	.70
恋人が自分を見守ってくれているように思うので, 大事な場面も切り抜けられる。	.13	.09	.02	.69
恋人とは, 自分と相手の立場を尊重しつつ, 必要な時には, うまく頼ったり頼られたりするほうだ。	-.03	.06	-.12	.63
恋人と触れ合っていると安心する。	-.01	-.33	.04	.45
恋人の隣で寝るとぐっすり眠れる。	-.01	-.31	-.05	.44
今交際している恋人と別れたら, すぐに新しい恋人を探すだろう。(*)	.13	-.05	-.14	-.43
うれしいこと, 楽しいことはまず恋人に報告したい。	.26	.00	.11	.38
因子相関行列				
		-.54	.42	.48
			-.14	-.38
				.32

(\*) は逆転項目

#### 4. 考察

恋人への依存性尺度の因子分析の結果、「依存欲求」、「依存拒否」、「不適応的依存様式」、「適応的依存様式」の4因子が抽出された。

「依存欲求」因子は、道具的な価値でなく精神的な助力を恋人に求めるものである。この因子は、主に関(1982)の依存欲求尺度と統合された依存性尺度を参考にして用いた項目からなる。統合された依存性尺度から「依存欲求」に含まれた項目は、困った時に恋人に相談し意見を求める内容を示す項目であった。竹澤・小玉(2004)は、悩みを抱えているときに他者からのアドバイスを得ることで、自分自身の不安が軽減し、情緒的な安定を得られると述べている。このことから、恋人への依存性には、道具的な価値ではない精神的な助力を求める中に、恋人を頼りにする欲求も含んだ「依存欲求」があると考えられる。

「依存拒否」因子は、恋人へ依存することを否定する態度である。この因子は、関(1982)の依存の拒否尺度の項目を参考にして用いた項目からなる。関のいう依存の拒否と同様に、潜在的に恋人へ依存することに不安があると考えられる。恋人への依存性の要素として「依存拒否」が得られたことから、恋人という親密な関係であっても、依存することへ不安を感じることがあり依存を否定する態度が現れることもあるということがわかる。

「不適応的依存様式」因子は、分離不安から恋人に対して従属的で献身的な態度をとるものである。DSM-TR (American Psychiatric Association, 2000/2004)によると、依存性パーソナリティ障害の基本的な特徴は、「従属的ですがみつくり行動をとり、分離に対する恐怖をもつ。・・・(一部略)・・・依存的で従属的な行動は面倒見を引き出すために作られており、他人の援助なしには十分に働くことができないという自己認識から生じている。」と説明されており、この因子の特徴に近いものがあると考えられる。自信のなさや恋人との分離不安から従属的行動をとる「不適応的依存様式」が恋人への依存性に含まれると考えられる。

「適応的依存様式」因子は、恋人の存在により安心感を得られるものである。この因子は、関(1982)の定義する「統合された依存性」尺度を参考にして用いた項目と、筆者の定義する依存様式の適応的側面として作成した項目からなる。高橋(1968)が依存性の発達の一つの方向として、「依存の様式が直接的なものから間接的なものへ、現実的なものから象徴的なものへと変化する」ことを挙げていることから、恋人が心理的支えの象徴として内在化しており、恋人との適度な心理的距離がとれていると推測される。つまり、「適応的依存様式」は依存性が発達する中で獲得される、恋人への依存様式であると考えられる。

### Ⅲ. 第二研究

#### 1. 目的

恋人への依存性と関係評価との関連を仮説検証的に検討すること(仮説はの5に記載)。及び、恋人への依存性と依存対象との関連を探索的に検討すること。

#### 2. 方法

(1) 調査対象：第一研究に同じ。

(2) 調査時期：第一研究に同じ。

(3) 調査内容：フェイスシート...所属、学年、年齢、性別。現在の恋愛状況...小塩(2000)を参考に、回答者が現在どのような恋愛状況にあるのかについて、「恋をしていない」「片思いの人がいる」「恋人が1人いる」「2人以上の恋人と付き合っている」のいずれか一つに丸をつけるよう求めた。恋人への依存性尺度...第一研究で作成したものをを用いる。39項目、5件法。関係への評価尺度...金政・大坊(2003)で用いた関係満足度および関係重要度を測定するための尺度。関係満足度尺度は“現在、あなたは相手との関係にどの程度満足していますか?”、“現在、その人はあなたの望むこと(要求)をどの程度満たしてくれていると思いますか?”の2項目。関係重要度尺度は“現在、あなたはその人との関係をどの程度重要視(大切に)していますか?”、“あなたは現在のその人との関係をどの程度持続したいと思いますか?”の2項目。計4項目、7件法。依存対象についての項目...高橋(1970)で用いた依存対象の機能をみるための項目。SCT形式で、その個人の存在を支える機能を果たしているものを記述する。計5項目。

(4) 分析方法：

<分析Ⅰ>

恋人への依存性を因子得点のバランスから検討するため、クラスタ分析を行う。また、各クラスタの特徴を探るため、クラスタを独立変数とし恋人への依存性の各因子得点を従属変数とした一要因分散分析を行う。

恋人への依存性のクラスタと関係評価との関連を検討するため、クラスタを独立変数、関係満足度・関係重要度を従属変数とする一要因分散分析を行う。

<分析Ⅱ>

自由記述によって得られた回答を、KJ法的手法を用いて分類する。

恋人への依存性の様相の違いにより、各依存対象の出現頻度の比率を算出する。

#### 3. 結果

<分析Ⅰ>

(1) 恋人への依存性についての群分け

恋人への依存性を因子得点のバランスから検討するた

め、クラスタ分析(最遠隣法)を行った結果、3つのクラスタ(以下、恋人依存性スタイルと呼ぶ)を得た。第1クラスタには134名、第2クラスタには8名、第3クラスタには17名の調査対象が含まれていた。

次に、得られた3つのクラスタを独立変数、恋人への依存性の4つの因子得点を従属変数として一要因分散分析を行った結果、すべてについて有意な群間差が見られた(依存欲求:  $F_{(2,156)}=37.55$ ; 依存拒否:  $F_{(2,156)}=9.64$ ; 不適応的依存様式:  $F_{(2,156)}=46.56$ ; 適応的依存様式:  $F_{(2,156)}=37.97$ , すべて  $p < .001$ )。各クラスタのプロフィールをFig.1に示す。

第1クラスタは、「依存欲求」と「適応的依存様式」が同程度の得点であり他のクラスタと比べるとやや高いことから、恋人に対して欲求を向けるだけでなく、その存在が心理的安定感につながっていると推測される。よって恋人に対して信頼関係をもとに依存することで安定感を得られていると考えられるため、第1クラスタを「安定的依存群」とした。

第2クラスタは、3群の中で「依存拒否」得点が最も高いがその他の得点は3群の中で最も低いということが特徴である。よって、恋人へ依存することへの強い不安感があり恋人への依存を回避していることが推測されるため、第2クラスタを「依存回避群」とした。

第3クラスタは、3群の中で「依存欲求」、「適応的依存様式」の得点が最も高く、恋人との関係において心理的安定感を得られていると思われる。だが「不適応的依存様式」得点も3群の中で最も高い得点を示しており、恋人との分離に不安を感じ恋人に対して従属的行動をとることも推測される。よって、恋人に依存することで安定感を得ているものの、分離に強く不安を抱いていると考えられるため、第3クラスタを「過剰依存群」とした。

#### (2) 恋人依存性スタイルと関係評価との関連

恋人依存性スタイルによって関係満足度及び関係重要度に差がみられるかを検討するため、恋人依存性スタイルを独立変数、関係満足度・関係重要度を従属変数とす

る一要因分散分析を行った。その結果、関係満足度・関係重要度ともに有意な群間差が見られた(関係満足度:  $F_{(2,156)}=7.20$ ,  $p < .01$ ; 関係重要度:  $F_{(2,156)}=11.30$ ,  $p < .001$ )。各恋人依存性スタイル群の関係評価得点をFig.2に示す。TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、関係満足度については過剰依存群 = 安定的依存群 > 依存回避群, 関係重要度については過剰依存群 > 安定的依存群 > 依存回避群という結果が得られた。

分析結果より、3つの仮説について検討していくと、まず、仮説1において、「恋人への依存様式の適応的側面が強いほど、恋人との関係満足度ならびに関係重要度は高い」と予測していたが、「適応的依存様式」が最も高い過剰依存群は関係満足度が高く、3群の中で最も関係重要度が高かった。これは、仮説1を支持するものと思われる。次に、仮説2において、「恋人への依存様式の不適応的側面が強いほど、恋人との関係重要度は高い」と予測していたが、「不適応的依存様式」が最も高い過剰依存群は関係重要度が最も高く、仮説2についても支持された。最後に、仮説3において「恋人への依存拒否が強いほど、関係重要度が低い」と予測していたが、「依存拒否」が最も高い依存回避群は関係重要度が最も低く、仮説3についても支持された。

#### <分析II>

##### (1) 依存対象の分類

筆者と心理学を専攻する大学院生4名の計5名により、依存対象を分類したところ、Table2のような依存対象カテゴリーが得られた。

##### (2) 恋人依存性スタイル別の依存対象比率

1) 恋人依存性スタイル別に依存対象の3つの大カテゴリー比率を算出した(Fig.3,4,5)。

2) 対人関係という観点から、依存対象についてより詳細に検討するため、人物にあたる「他者」の小カテゴリーすべてと「自分」の小カテゴリーの1つである「自分自身」をとりあげて依存対象人物の比率を算出した(Fig.6,7,8)。

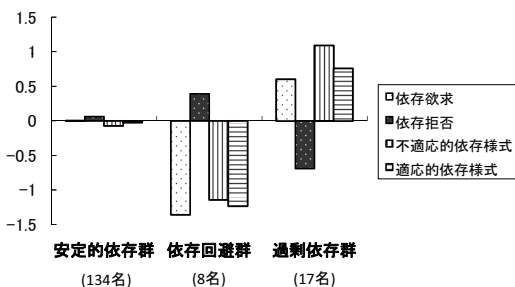


Fig.1 恋人依存性スタイルのプロフィール

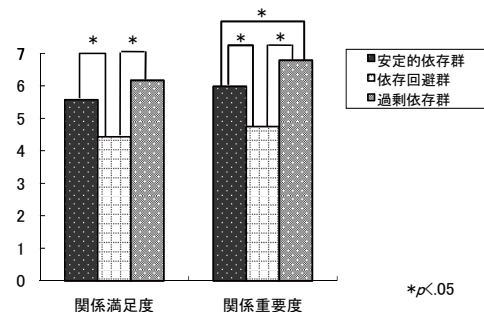


Fig.2 恋人依存性スタイル3群の関係評価得点の平均

Table 2  
依存対象のカテゴリ分類

大カテゴリー	小カテゴリー	各カテゴリーの例
他者	恋人	恋人。または恋人と関わること。
	昔の恋人	昔の恋人。
	好きな人	片思い中の相手。
	昔好きだった人	昔片思いをしていた相手。
	友人	友人、仲間、幼なじみ。または友人・仲間・幼なじみと関わること。
	家族	兄弟姉妹、祖父母。または家族と関わること。
	親	母親、父親、または両親。または親と関わること。
	目上の人	先輩、先生、教授、コーチなど。
	直接的関係のある人	いつでも味方になってくれる人、支えてくれる人など、自分と直接的な関わりをもち、自分に影響を与える人。
	間接的関係のある人	自分より辛い人、頑張っている人たちなど、自分とは直接的には関わらないが、間接的に影響を与える人。
もの・こと	自分以外の人	周りの人、自分以外の人など、不特定の他者。
	芸能人	芸能人、スポーツ選手など。
	人とのつながり	人との関わり、会話することなど。
	奉仕・賞賛	人や社会につくすこと、人にほめられることなど、人に対し奉仕することや賞賛を受けること。
	人の笑顔・あたたかさ	人の笑顔をみること、人のぬくもりやあたたかさなど。
	大切にしている言葉	恩師の言葉、格言、歌詞など、心に残る大切な言葉。
	熱中できること	部活、スポーツ、仕事、学問など。
	趣味・嗜好	趣味、お酒、食事、睡眠など。
	居場所	家、自分の部屋など。
	ペット	飼っている犬、うさぎ、ハムスターなど。
自分	問題への対処法	どうやって気をまぎらわすか、つらいことなど。
	その他のもの	上記に含まれないもの。
	自分自身	自分自身、自己、私。
	自分の過去	自分の過去の経験。
	自分の現在	自分の現在の生活、時間など。
	自分の未来	将来の夢・目標、未来の自分の姿など。
自分のもつもの	自分の才能、気持ちなど、自分の持ち味のようなもの。	
向上心・価値観	自分を磨くこと、成長、自分の信念など。	

#### 4. 考察

##### <分析 I >

##### (1) 恋人依存性スタイルについて

恋人への依存性の因子得点によるクラスタ分析の結果、3つの恋人依存性スタイルが得られた。

安定的依存群は、すべての得点が平均点に近く、恋人への依存性は安定的で恋人との適度な心理的距離が保たれていると考えられる。また、一概には言えないが、恋人という親密な間柄の人に対しても一定の心理的距離を保とうとする現代青年の他者との付き合い方が垣間見えるように思われる。依存回避群は、「依存拒否」が3群の中で最も高く、恋人へ依存することを回避している群であると思われる。過剰依存群は、「不適応的依存様式」が3群の中で最も高く、「依存拒否」が最も低い。このことから、恋人に対し依存することを否定せず強く依存欲求を示し、その充足の仕方は不適応的でもあり、適応

的でもある過剰な依存性を示していると推測される。

(2) 恋人依存性スタイルと関係評価との関連について  
恋人依存性スタイルと関係評価の関連から、恋人依存性スタイルの各群の特徴が明らかになった。

安定的依存群は、関係満足度も関係重要度もともに高く、やはり恋人への依存性の安定感と、恋人との関係評価の高さには関連があると考えられる。赤澤(2006)が「一般的な恋愛意識がカップルの関係の安定性に寄与している」と述べているように、この群のように最も人数が多く、依存を拒否せず、また過度でもない、いわゆる“一般的”な依存性を恋人に向けた場合カップルの関係は安定しやすいことが示唆された。

依存回避群は、関係満足度も関係重要度もともに低く、恋人との関係にあまり満足できず、重要視もしていないことが明らかになった。恋人への依存拒否が高いほど、関係重要度が低いことは予測どおりであり、この群の人



たちは恋人に対してそれほど執着していないことがわかる。

そして、最も特徴的なのは、過剰依存群である。「適応的依存様式」も「不適応的依存様式」も高いこの群は、関係満足度も関係重要度も高い。この群の人は恋人に対して非常に執着しており、恋人との関係に満足し、さらに分離不安から関係を持続したい欲求が生じ関係を重要視していると思われる。

<分析Ⅱ>

(1) 依存対象の分類について

依存対象を分類したところ、「他者」「もの・こと」「自分」という3つの大カテゴリーと、それぞれの大カテゴリーからさらに様々な小カテゴリーに分類された。

大カテゴリーは、高橋(1970)の分類では「人間」「人間以外」「自己」となっており、本研究の分類と類似していることから、高橋と同様の依存対象が得られていることがわかる。だが、小カテゴリーについては、より幅広く詳細な依存対象が挙げられていることから、高橋の研究した1970年代よりも、現代の青年の依存対象が多様化していることが予想される。

(2) 恋人依存性スタイル別の依存対象比率について

恋人依存性スタイル別に依存対象の比率を算出した結果、各群に特徴がみられた。

安定的依存群は、依存対象人物のうち最も大きな比率を占めるのは恋人であり、友人や家族など恋人以外の身近な人物も数多く依存対象として出現していた。このことから、恋人の存在は大きいものの、恋人以外の人との対人関係も良好であるように思われる。

依存回避群は、依存対象人物のうち、恋人は4番目の比率であった。このことから、依存回避群の恋人への依存を否定する態度がうかがえる。恋人という親密な関係であっても依存性を向けられず恋人との関係そのものに執着していない特徴をもつ、この群の人たちは恋人よりも友人や家族、そして自分自身を依存対象としているようである。

過剰依存群は、依存対象人物のうち、恋人が特に大きい比率を占めており、恋人以外の人物が占める比率との大きな差があった。多川(2003)が、恋人に依存することで周囲の人との関わりが淡泊になってしまう可能性を示唆しているように、この群の人たちは、恋人以外の他者との関係がやや希薄化しているのではないかと考えられる。また、一般的に人々は嫉妬心と愛情を同一視する傾向があり、相手に対して嫉妬を感じている者ほど、その相手を愛していると認知されやすいことが示されているが(Puente & Cohen, 2003)、独占欲の高まりが嫉妬や排他感を感じさせていることも考えられる。

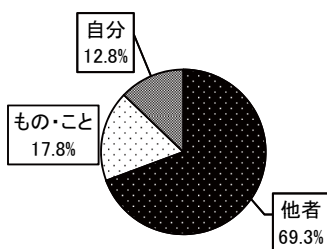


Fig.3 安定的依存群の依存対象比率

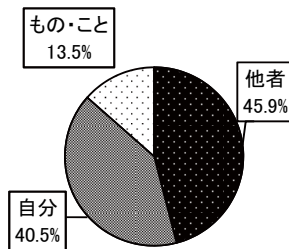


Fig.4 依存回避群の依存対象比率

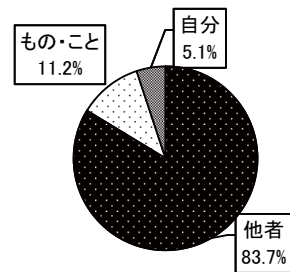


Fig.5 過剰依存群の依存対象比率

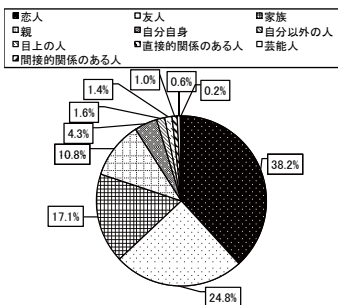


Fig.6 安定的依存群の依存対象人物の比率

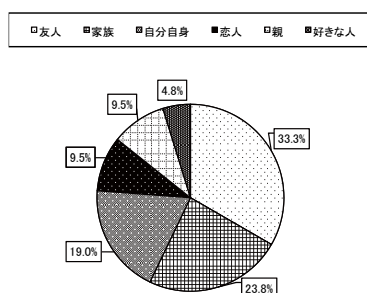


Fig.7 依存回避群の依存対象人物の比率

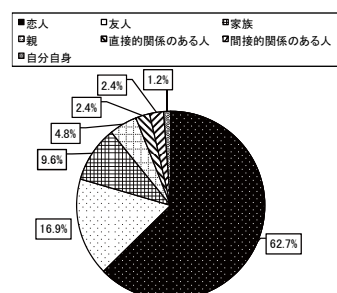


Fig.8 過剰依存群の依存対象人物の比率

#### IV. まとめと今後の課題

##### 1. まとめ

本研究から、恋人への依存性のあり方として、「依存欲求」、「依存拒否」、「不適応的依存様式」、「適応的依存様式」の4つの要素が存在することが明らかとなった。特に、「不適応的依存様式」と「適応的依存様式」は、恋人への依存性において特徴的である。また、多くの青年は恋人に対し安定的な依存性を示しており、恋人以外の人々との対人関係も円滑であるように思われた。ごく一部の青年には依存を回避する者もあり、恋人との関係に満足できず、恋人との関係そのものをあまり重要視していないようであった。また、恋人に過剰に依存している者は、恋人の存在が心の中の大部分を占めており、恋人との関係に満足しているようであった。しかし、恋人以外の他者との関係が希薄化している可能性も考えられた。恋人だけに過剰に依存している者が、恋人を失ったときに、精神的健康を保てなくなるのではないかという危うさも示唆された。安達(1994)が「恋人は、自己の安定や親密さの形成に関わる重要な agent である。」と述べているように、現代青年にとって恋人は心の安全基地として機能する重要な依存対象であり、その恋人への依存性の様相の違いが、恋人以外の対人関係にも反映されていることが示された。

##### 2. 今後の課題

本研究では、恋人への依存性の様相について検討を行ったが、本来、恋人との関係はお互いの働きかけによって発展していく関係であり、互いに依存し合って成り立つものである。今後、カップル単位での調査により恋人への依存性の相互作用についても検討することが課題である。現代青年の恋人との関係をより具体的に把握することは、多様化している恋人関係・夫婦関係の問題に対応するカップル・カウンセリングなどの臨床的アプローチの一助となるであろう。

##### 謝 辞

本論文を作成するにあたり、貴重なご指導、ご助言をいただきました九州大学大学院人間環境学研究院、野島一彦教授、高橋靖恵准教授に深く感謝申し上げます。

##### 引用文献

安達喜美子(1994). 青年における意味ある他者の研究  
とくに、異性の友人(恋人)の意味を中心として

青年心理学研究, 6, 19-28.

赤澤淳子(2006). 恋愛中のカップルの性別役割・恋愛意識・恋愛行動が関係評価に及ぼす影響 カップル単位の比較検討 今治明德短期大学研究紀要, 30, 1-18.

American Psychiatric Association. (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4<sup>th</sup> edition text revision)*. American Psychiatric Association. 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸(共訳)(2004). DSM-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル新訂版 医学書院, 687-691.

平木典子(1990). 夫婦の愛の形成過程と崩壊過程 夫婦・家族療法の実践から 心理学評論, 33(3), 393-406.

Howard M. Hapern. (1982). *How to break your addiction to a person*. Fine Communications. 白根伊登恵(訳)(2001). ラブ・アディクションと回復のレッスン 学陽書房, 113-133.

金政祐司・大坊郁夫(2003). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 19, 1, 59-76.

小塩真司(2000). 青年の自己愛傾向と異性関係 異性に対する態度, 恋愛関係, 恋愛経験に着目して 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 47, 103-116.

Puente, S. & Cohen, D. (2003). Jealousy and the meaning (or nonmeaning) of violence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 449-460.

関知恵子(1982). 人格適応面からみた依存性の研究 自己像との関連において 臨床心理事例研究, 9, 230-249.

多川則子(2003). 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的研究 対人関係観に着目して 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 50, 251-267.

高橋恵子(1968). 依存性の発達の研究: 大学生女子の依存性 教育心理学研究, 16, 1, 7-16.

高橋恵子(1970). 依存性の発達の研究: 大学・高校生との比較における中学生女子の依存性 教育心理学研究, 18, 2, 1-11.

竹澤みどり・小玉正博(2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319.

渡辺登(2002). よい依存, 悪い依存 朝日新聞社, 46-59.